

平成 29 年秋における外来魚生息状況調査結果

田口貴史・臼杵崇広・酒井明久

1. 目的

平成 29 年秋季の外来魚（オオクチバス・ブルーギル、以下バス・ギル）当歳魚の生息（発生）状況を琵琶湖沿岸域での定点調査により把握する。

2. 方法

平成 29 年 9 月 26 日から 11 月 7 日にかけて、琵琶湖沿岸域（水深 7m 以浅）の 116 定点（北湖 75 定点、南湖 41 定点）で調査を行った。調査は小型ビームトロール網（ビーム長 4m）を小型動力船で曳網（底曳網）することで実施した。曳網速度は 0.27m/秒を基準とし、北湖では 5 分間、南湖では 3 分間曳網した。採捕魚の測定結果から、バスでは北湖、南湖別にそれぞれ標準体長 150mm、120 mm 未満を、ギルでは標準体長 55mm 未満を当歳魚とし、その生息密度（曳網面積 1ha あたりの採捕尾数）を算出して、平成 19 年以降の結果と比較した。

3. 結果

バス当歳魚の生息密度は北湖では 492.9 尾/ha（前年比 125%）、南湖では 674.4 尾/ha（前年比 228%）で南北ともに前年に比べて増加した（図 1）。ギル当歳魚の生息密度については、北湖で 2277.9 尾/ha（昨年比 278%）で、過去最高となった一方、南湖では平成 19 年以降で 2 番目に低い水準となった（1238.6 尾/ha、前年比 3.5%）（図 2）。

南湖のギル当歳魚を除いては、バス、ギルともに発生量が「平年並～多い」傾向にあることから、外来魚生息量を抑制するためには、これら当歳魚が親魚になる前に駆除することが重要と考えられる。

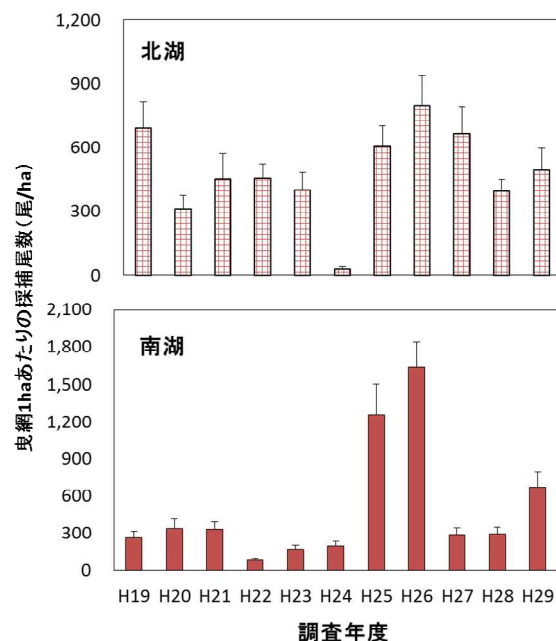


図 1 曳網 1ha あたりのオオクチバス当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）

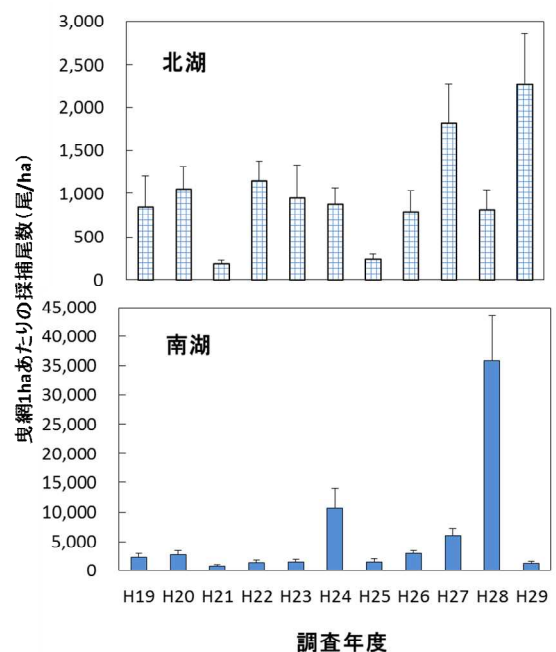


図 2 曳網 1ha あたりのブルーギル当歳魚採捕尾数の経年変化（エラーバーは標準誤差）